

蒲島熊本県知事 様

県民の為、日夜ご努力頂いておりますことに心から敬意を申し上げます。

川辺川ダムに関し、不知火海漁業者の一人として意見を述べます。

世界各地で環境異変が起こり、温暖化が言われておりますが、この不知火海でも水温が上昇しており、産卵漁場としての役割を果たし得ない状況になってきているような感があります。こういった中で、またダムの是非が問われていますが、賛否両論意見は出し尽くされた感があり、賛成の人も反対の人も同じ意見を繰り返しているように思います。私も、平成13年12月9日第1回の相良村での討論会で川辺川ダムが不知火海（八代海）に及ぼす影響というものを質問しました。その後も、川辺川ダム対策委員会で同じ質問を繰り返してきましたが、国土交通省には議論が深まるどころか川辺川ダムが不知火海に与える影響は無視し得る程度と結論づけられました。

自然は、海と山と川とが一体となって、初めて資源を生み恵をもたらすものと思います。この不知火海は、鹿児島県を含めた広範囲の沿岸地域に多大な潤いをもたらし、漁業者の生活を支え、漁村社会が構築されてきました。まさに、人類が天から授かった財産であります。この豊富で恵まれた海が川辺川ダムでその一角が崩れるようなことになれば、恩恵を享受してきた漁業者は疲弊し、漁村は崩壊していくのではと心配します。

長崎県諫早でも、海には影響はないということで干拓事業が進められてきましたが、計り知れない影響が出ているように思います。

この不知火海も同じ道をたどるのではと危惧しています。球磨川に注がれる既存ダムの4倍もの大規模ダムが水質と水量は変わらないと、繰り返す国土交通省の説明は説得力があるものではありません。

過去に既存ダムの影響を目の当たりにしてきました。本当に無視し得る程度なのでしょうか。

せっかく、豊富な資源に恵まれたこの不知火海を私たちの時代で終わらせてはならない、次世代に引き継いでいくのが私たちに与えられた使命だろうと思います。

## 川辺川ダムに関する意見

私は昭和40年7月3日の人吉大水害で被害を受けた一人として、ダムが下流域の洪水予防対策—治水には最終的には何の役にも立たないという観点から、川辺川ダム建設反対の意見を述べる。

## ダム放流はダムのための調節放水であること

球磨川上流の県営市房ダムの操作規則（昭和36年8月24日、建設省同第10号9の第4章洪水調節等の20条一、二、三項）は、ダム湖への流入量、 $m^3/秒$ によって、ダムよりの放水量を決めているが、洪水調節というのはダム堤をオーバーブローしないように貯水位を283m以下に保つ為の調節であって、球磨川下流域の洪水調節とは関係なくダムより放水される規定であるから、河川の上流にあるダムは、下流域の洪水対策には役に立たない、ことを示している。

例えば、市房ダムの計画最大放水量は650 $m^3/秒$ であるが、大きな降雨によって貯水位が洪水時満水位を超えることが予想されて「但し書き操作」による計画最大放流量を超えて放流される場合、計画最大放流量を超える流量分の水害をダム下流域で起こすことになる。

球磨川本流に市房ダムが建設されて昭和40年7月の出水を体験した人吉市民が川辺川ダム建設に反対する理由は「計画規模を超える洪水時における、但し書き操作」によって、計画規模を超えた流量が放流された場合には、川辺川、球磨川の流域においては壊滅的な氾濫が起こることが予測され、かつその放流による被害を実感したからである。

これまでも日本各地の河川ダムで、計画規模を超えた水量が放水され、甚大な災害を及ぼしている事例は枚挙にいとまがないが、これらを徹底検証することはなぜかサボタージュされている。

## ダムは治水の最後の手段ではないこと

国土問題研究会の上野鉄男氏の「川辺川ダム計画の問題と求められる治水対策」（同会パンフレットシリーズNo.3, 9頁）によれば「現在、球磨川で進められている治水

計画はダム建設も含んで、ある程度までの洪水に対しては氾濫を抑え込もうとするものであるが、その限度を超える『超過洪水』に対しては有効な対策が検討されておらず、超過洪水では却って被害が大きくなる。ダムは治水対策の『最後の手段』ではなく、従ってまずダムによらない対策を」と主張されておられる。けだし至言であると思う。

## 首尾一貫しないダム計画の経緯

国交省は、川辺川ダムを建設して球磨川流域住民の生命財産を守ると、説明されているが、川辺川ダム計画に推移をみると、それは首尾一貫していない。

球磨川水系のダム計画は電源開発（株）が発電ダムとして計画したもので、神瀬ダム（人吉市民の反対で中止）を作ろうとしていた昭和30年頃、川辺川・藤田にも発電ダムを計画し、地質調査も終了していたが、水主火従の時代は終わったとの判断から手を引き、調査資料の一切を建設省に差し出したという経緯がある。

そして昭和40年7月の球磨川水害で、洪水調節ダムとして建設省が取り上げ、河川流域の総合開発の名のもと、巨額な多目的ダムにと膨らませたのは周知の通りである。

昭和40年の未曾有の大水害—市房ダムの放流が引き金となつての球磨川洪水を体験した私達罹災者は、あの水害を通して、ダムが防災よりも加害の主因になることを身をもって体験熟知し、ダムによらない治水、防災を強く要望してきた。その結果、40年水害以降43年の河川整備、緑の山復活で流域の防災事業は大きな効果をあげている。川と流域住民の共生こそが、これからの大命題でなければならない。

## 無知無明なるアドバイザーの不見識発言

しかるに、過般、知事が提唱して設置された有識者会議の現地調査に、初めて随行したアドバイザーなる某氏が、私的コメントとはいえ「人吉市の人々が流域に住みつづけたいと考えるならば川辺川ダムは必要」と麗々しく発言された由、新聞紙上で知った。如何に無知無明とはいえ、その不見識と横柄な断定ぶりは学者としてはもとより世界一市民として許されないものであることを申し添える。

蒲島知事には九月、川辺川ダムのは是非を表  
明されるこのことですが、五木村の元水没者  
として率直に意見を申し上げます。  
蒲島知事には歴代県政が一貫して私達に約  
束したとおりに、ダムは推進してください。  
ここ迄、五木村を引き回しておきながら、今  
更知事が交代することです。ダムを中止とか、是  
非の表明とかでは五木村は困るのです。  
五木村は県を信じ多大な犠牲を負い引き返  
すことができない所までできませんでした。五木村の

犠牲を重んじられ、下流住民の命と財産を守るために生かして下さい。お願いします。

次に同ダムに関連する五木村再建についてです。五木村は長期化による翻弄は計り知れない損失であり、現状の先行き不透明も大打撃です。その中で特に昭和五五年十一月三十日の水没団体と建設省、熊本県による確約書は、昭和五六年四月二十九日の補償調印の前提となっていています。しかしながら、この確約書を後で気づくと、まさに作為された行政不作為

為だったのです。つまり三年で水没者の移転代替地の造成を完成するなど、出来もしないことです。しかし県がこれに立ち合ったことは、私達には心強い文書だったのです。この確約が原因で水没世帯の約半数世帯が補償調印後僅か三年で離村して終いました。これが今日の人口減少と高齢化率四〇%を引き起こした主因であると考えています。蒲島知事にこの事実関係をぜひ確認されますようお願い申し上げます。

先達て蒲島知事の逆境の中にこそ夢があるの  
本を読み、私は深く感動しています。改めて  
熊本県知事に就任されたことを喜び尊敬申し  
上げています。知事のようになり五木村も前向き  
に考え、再建に努力しなければと痛感してい  
ます。しかし現状の五木村は残念ながら最悪  
な状態です。はっきり言って一村行政の力で  
は再建は困難です。ぜひ県の本格的ご支援を  
お願い申し上げます。私の意見といたします。

熊本県知事 蒲島 郁夫様

## 「川辺川ダム事業に関する意見について」

・ 私は、球磨川上流に位置する、市房ダムを擁している水上村で生まれ育った一住民です。小学校低学年の時にダムが完成し、今までにいろいろな自然環境下でのダムの存在を見てきました。

そんな中、ある年は台風や集中豪雨による出水、ある時は大干ばつ等様々な場面で、ダムの果たしてきた役目を考えた時に、ダムの存在は甚大だったと思います。

特に九州山脈に囲まれた山間地域では、水との共存なくして生活は成り立ちません。川辺川ダムの建設は、川辺川流域は基より、下流の球磨川流域に位置する人吉市、球磨村、坂本村、芦北郡、八代郡、八代市に至る地域住民の生命及び財産を今後より安全で安心して守るためには、是が非でも必要なダムで有ると思います。

また、今まで長くダムの着工を先送りされてきた五木村住民の、今後の先行き不透明な生活環境の中で将来への不安、及び今後地球温暖化に伴う予測できない大水害、並びに農業利水を待ち望んでいる農家等を思う時に、川辺川ダムの早期工事着工はもちろんのこと、早期完工を期待します。

今までにダムが必要だとして、長い年月を掛けてすでに用地買収に始まり、道路の付け替え工事、五木村住民を含む水没地の施設移転のための代替地工事、それに伴う多大な調査等に費やした膨大な税金は基より、これらが元の状態に戻ることは不可能なことであるとともに、関係者を含み関係者以外の多くの労力がこれまでに、この事業に投入されている現状を考えれば、ダムを建設することは当然と考えます。



## 川辺川ダムへの意見書

川辺川ダムの建設計画。昭和41年、今から48年前、ダム建設賛成、反対、色々議論して、48年間、治水、洪水、砂防、放流水質、濁度、下流河川海域への影響、清流と景観等々の問題があります。地球温暖化による、全世界が気候変化による水不足、砂漠化（中国からの黄砂現象が多くなっています）等々皆さん御存知と思います。皆さん、川辺川ダムは水瓶として将来、子々孫々の為には是非造っておきましょう。

川辺川ダムは水瓶と前々から私は云って来ました。果の有識者会議のオランダ人のアドバンサーのグレイック・デ・ブラウン氏(65)の発言は最適だったと思います。将来の世界の水不足、流域住民の為だと思います。私はおと平位前から「地球環境をみんなを守ろう」地球の将来の為に「水と緑は地球の命」と云って来ました。

今日では世界の国々が地球環境温暖化問題、水質、水量で大問題となっています。歴代の知事さんが(寺本、沢田、細川、福島)

「人吉、球磨を守る、八代まで守る為には川辺川ダムは必要で

ある」と水没する五木村の人達を口説き、村人達は泣きく

村を離れて行きました。私も球磨農道を昭和31年に

卒業しています。五木の同級生、先輩、後輩達も、ガム反対  
でした。自分達も、下流の皆さんも被害から守る、という事に  
納得して行きました。2008年7月28日近畿地方に降った大雨の  
影響で都賀川が急激に増水、下流で子供達多数被害に  
合いました。この様な急激な河川の増水は、どこで起るても  
おかしくないと、氣象庁は云っています。局地的な集中豪雨は  
近年、とりわけ発生が多くなっています。一方で異常少雨の  
出現も増えております。市谷ガムもそうだったんですね。  
宮崎の増葉ガムも濁水しています。見学に行ってみて下さい  
五木村を離れた人達の気持も考え、川辺川ガムはせむ  
造るべく必要があると思えます。

将来水不足になる原因として、雨が降るも、地下浸透しない  
環境になっています。町、京都市中心部の敷地が80〜90%  
あるいは、全部アスファルト、コンクリート敷になっています。  
降った雨は、すべて側溝排水、それぞれの川に流れています。  
車社会で、道路はアスファルト、排水も側溝、林道、農道が  
すべてがアスファルトが多くなっています。道路両側も昔は

畑・水田等々が、今は工場・店舗・駐車場が多く、農家の

用排水路も昔は土壌直堀でしたが今はほうろ方コンクリート

側溝になり、河川も洪水排水が良くなる様に、大・中・小川

すべてコンクリート張りです。海に流れていくのが早くなっています。

皆さん自分達の家で排水（炊事・洗濯・風呂）をどこに流して

いるか（川）確認して下さい。球磨川も、人土のうり下りの石が

白くなっているのは家庭排水等の影響だと思っています。

水害の無い大雨が降って、石の白い生活排水を洗い流して

青い苔が生えて、鮎も大きく育つと思っています。

球磨川も、海も、清流、水質を守るのは、私達ではなめらうか。

地球環境を守る為に、人間が永遠に住める地球にしていく

為には一人一人が自分自身の環境問題（家庭排水）に取り組む

必要があると思っています。川辺、川沿いはあらゆる角度から

考えて、永遠の水瓶として是非共造っていただきたいと思います。

思っています。

## 川辺川ダムへの意見書

川辺川ダムの建設計画。昭和41年、今から48年前ダム建設賛成、反対色々議論して、48年向、治水、洪水、砂防、放流水質、濁度、下流河川海域への影響、清流と景観等々の問題点がありますが、地球温暖化による全世界の気候変化による水不足、砂漠化（中国からの黄砂現象）等々、皆さんよくお存知でしょう。皆さん、川辺川ダムは水瓶として、将来子孫の為に是非造っておきましょう。

私は30年位前から「地球環境をみんなでお守ろう」地球の将来の為に「緑の水は地球の命」と云って来ました。

今では世界の国々が地球環境問題、水質、水量で大問題となっており、歴代の知事さん（吉本、沢田、細川、福島）人吉、球磨を守る、八代まで守る為に、川辺川ダムは必要であると水没する五木村の人達を以て説き、村人達は、泣き泣き村を離れて行きました。私も球磨農高を昭和51年に卒業して、五木の同級生、先輩、後輩達もダムに反対でしたが皆さんの厚いお納得して行きました。

将来水不足になる原因として、ある新聞記事に、雨が降っても

地下浸透ほしない環境になっていいます。町、市、都市中心部の敷地、80~90%の面積が、すべてアスファルト敷のコンクリートです。農家の田舎に給水する用排水路が、昔は土壌直挿でしたのが、今ではすべてコンクリートです。洪水から守る為には、大、中、小、川はすべてコンクリート張です。海に流れ出していくのが早くなっていいます。皆さんも自分達の家庭環境でわかりやすい様に、家庭排水の(炊事洗濯風呂)排水溝も、すべてコンクリート、ビニールパイプになっていて川に排水管となつて流れているのです。球磨川も人吉から川下の石が白くなつていいます。これらも家庭排水等の影響だと思っています。水害の無い大雨が降ると、石の白い生活排水を洗い流して、青い苔が生えて、鮎もたくさん育って欲しいものだと思っています。川辺川ダムを造ると鮎が育たないと言う人も居ますが地球環境を守る為には、人間が永遠に住める地球にしていく為には一人一人が自分自身の環境問題に取り組む必要があると思っています。そういふ事を考えると、川辺川ダムは永遠の水瓶として、是非共造つて頂きたいと思っています。

## 『川辺川ダム事業に関する県民の意見』

川辺川ダム事業（本事業）により直接影響を受ける球磨川流域の住民の一人として、切に意見申し上げます。

本事業の計画当初から数十年が経過し、社会情勢の大きな変化でダム建設の目的も多目的から治水を主とする事業内容になってきました。その治水の目的さえ、地元流域に住む私にはとても不透明でむしろダム建設による二次的な水害や濁水を危惧します。川は本来流れることでその役割を果たし、私達流域住民をはじめ熊本県民は川辺川・球磨川の恩恵を多く受けています。もちろん梅雨期や台風の時期には洪水の危険性もあり、このことにより貴重な人命や財産が失われることはできる限り未然に防ぐ対策が必要です。たとえ国営の本事業がなされても球磨川流域におけるすべての治水対策が万全となるとはとても信じがたく納得できません。これまで国土交通省の流域説明会にも参加しましたが、きけばきくほど不安が募ります。国営に任せても県の財源から多額の出費をするくらいなら、熊本県主体で流域住民が納得する治水対策をきめ細かく行ったほうがよいと考えます。本事業による治水は洪水防止が主だと理解しますが、近年の異常気象による集中豪雨による被害の多くは土砂災害もあります。川辺川流域も含め球磨川流域における治水対策は、地域ごとの災害の危険性を分析したうえで河川の掘削や堤防のかさ上げ、治山のための荒廃地の植林などやるべきことはたくさんあると考えます。直接地元の中小業者が受注できる事業であれば地元も活性化でき県の財政にも反映できると考えます。また球磨川本流には治水を目的にしないダムもあり、豪雨時に連携もとれない事からも上流にいくら治水目的のダムをつくっても目的は達成できず無用の長物と化しそうです。蒲島知事は目標をもってことを成すことを重視されていますが、今まさにここで生活する熊本県民の意見とともに熊本県の姿勢を示すことが大切と考えます。

また本事業により川辺川ダム建設予定地はもちろんのこと球磨川流域および不知火海沿岸に及ぼす環境への影響がとても気がかりです。私達にとって、川辺川上流域の山々そして球磨川から八代海につながる環境は生命線であり、次世代に引き継がれるべきかけがえのない宝です。本事業は、環境アセスメントの対象になっていないばかりでなく、本体工事着工前に付帯工事によると思われる川辺川の環境変化が危惧されています。球磨川流域での鮎漁は地元漁師ばかりでなく遠く本州からも足を運ばれる貴重な観光収入源でもあります。球磨川下りやラフティングも然りです。ダムがなく自然にもやさしい方法で人の手の入った河川は流量も豊富で澄んだ水が絶えず流れ、多くの人を魅了し引き寄せます。流域はじめ沿岸漁業もさかんになり、地元は活性化し観光業も成長する。そんな熊本県ならではのオリジナリティのあるビジョンをもって一つのハードルを越えることが更なる熊本県の発展を意味すると考えます。

どうか県民一人一人の目線で意見を集約・ご検討いただき、後世に大きな後悔とならないようなご判断をお願い申し上げます。

# 川辺川ダム建設は中止していただきたい

## (中止の理由)

### I 危険きわまりないダム建設の地盤だからです。

川辺川ダム建設予定地の地盤はとても弱く決壊の恐れがあるからです。

- ① 私の教え子がダム建設のコンクリート吹きかけの仕事をしていますが、川辺川ダム建設の仕事で人吉に帰ってこれると楽しみにしていたら建設予定地の地盤がとても弱くて、調査をしないと、しばらくは取りかかれないと言っていました。
- ② 元熊本大学教授の地質学者松本氏に、このことを質問しましたところ、「ダム建設予定地は地質学からいっても、ダムを建設する所ではない。とても危険なところで、川辺川の両岸とも地盤がとても弱く、大量に貯水したら、ダムは支えきれないので、決壊の恐れがある」とのことでした。
- ③ 最近全国的に地震が多く、中国の四川省の地震からみても、とても不安です。しかも昨年、人吉でも活断層があると指摘されました。その地域は、ダム建設の予定地に近いところを通っているからです。

### II 地球温暖化が問題になっている中、ダムの放水は危険きわまりないからです。

- ① 私は熊本大水害の体験者であり、人吉でも三度体験しました。妻の実家が人吉市紺屋町です。1階の軒すれすれまで水が来ました。多くの水害体験者が話されているように、市房ダムの放水後、急激に川の水位が上がり大変な目に遭ったのです。
- ② その時のことを思い出せば思い出すほど、市房ダムの放水の上に、川辺川ダムまでも放水されれば、その水量は計り知れない流量となり、再び水害を引き起こすことになるのは必至です。両方のダムで調節できるような雨量ではないのです。ダムが耐えられないから両方のダムが放水するということになりかねません。

以上



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

今回の公聴会で意見発表を希望したのに、「抽選で外れた」との趣旨の通知を受け取った。一体どのような方法で抽選したのか。

また知事が、「公聴会で出た意見が流域の意見を反映しているか検討が必要」みたいな発言をしたことに、非常に憤慨している。今回の公聴会は、知事自身が住民の意見を聞きたいとの趣旨で開催したものではなかったか。知事は、流域の住民の意思をどうやって確認しようというのか。

有識者会議の現地調査に参加したオランダ人アドバイザーのブラウン氏が、短時間の視察にもかかわらず「人吉市の人々が流域に住み続けたいと考えるならばダムは必要。従来計画の場所、規模のダムが最適だ」とのコメントを出した。それに対し、知事は「その知識の深さに感銘を受けた」と述べた。

ブラウン氏や知事の見解は、球磨川の水害被害の実態や住民の意識とかけ離れている。球磨川流域で、近年の記録的な豪雨で浸水被害にあわれた方々に聞き取り調査した結果を見ても、ダム以外の治水対策を求めている方がほとんどだ。世論調査でも、川辺川ダム反対が賛成を大きく上回っている。川辺川ダムに対する民意は明らかだ。

ところが、これまで国土交通省をはじめ、地元首長の大半は川辺川ダム推進の立場をとってきた。川辺川ダムに対する住民と行政の意思に大きな隔たりがあることが、この問題を長期化させてきた大きな要因だ。もし、知事が住民の意思と食い違った判断をすれば、この問題はさらに泥沼化するのには確実だ。公共事業は住民のために、住民の税金によりなされることを、知事は肝に銘じるべきだ。





## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

人吉市での「川辺川ダムに関する県民の意見をお聞きする会」を傍聴しての感想です。

5月の人吉市長の公聴会では、ダム反対意見が47で、ダム賛成意見はわずか1でした。その数字は、球磨川流域で近年の記録的豪雨で浸水被害にあわれた方々に聞き取り調査した結果(ダム以外の治水対策を求められている方が67戸で、治水対策に川辺川ダム建設を望まれる方は、わずか2戸)や、国土交通省の「川づくり報告会」の発言録(全発言数887件のうち「治水のために川辺川ダムが必要」との発言はわずか4件)をみても、川辺川ダムに対する流域住民の意思を表しています。

ところが、県主催の「お聞きする会」では、ダム反対意見が12、ダム賛成意見が12でした。ダム賛成意見の12名は、水上村から球磨村まで、流域を全て網羅していました。明らかにおかしいのが、県は「人吉での発言希望者43名から抽選で24名を選んだ」としていることです。意見発表希望者は名前や住所を書いただけで、意見の内容(ダム賛成反対含めて)まで県に伝えてはいませんでした。それでどうして、12対12などという数字になるのでしょうか。球磨村の村長さんも正当に抽選で選ばれたのですか。県は、ダム賛成意見12名をはじめから決めていて、残りの12名を希望者の中から適当に選んだとしか考えられません。

同じ人吉カルチャーパレスで13年前にあった、1995年の建設省(当時)の「川辺川ダム事業審議委員会」の公聴会で、私も発言しました。そのときは、意見内容も事前に提出し、賛成・反対ほぼ同じ数を建設省が選びました。その方がよっぽど実りのある公聴会でした。

熊本県は川辺川ダム促進に大きく舵を切ったと言わざるを得ません。「抽選」で意見発表から外れた私は、非常に憤慨しています。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

7月12日の現地調査に同行、傍聴しました。その中では、熊本県職員により「人吉地区は毎年計画高水ぎりぎりまで増水し、大変危険な場所である」というような説明がなされました。

しかし、人吉市街地の球磨川は、一般的に平野部に見られる天井川とは違って、万一越流しても計画高水位(HWL)と堤内が同じ程度の高さのところが多い「掘り込み河道」となっており、破堤する可能性はほとんどないと考えられます。また、国土交通省は人吉では5年に1回、破堤して甚大な被害が発生するとしています。これまでそのような事実はありません。だからこそ、住民は長年球磨川沿いに住んできたのです。

昭和35年に球磨川の水害防止のためと鳴り物入りで市房ダムが完成し、これで洪水被害から解放されると流域住民は期待しましたが、それは完全に裏切られ、38、39、40年に3年連続で水害に見舞われるなど、むしろそれまで以上に洪水を心配しなければならなくなりました。しかも市房ダムは46年と57年には計画通りの洪水調節ができず、非常事態としてただし書き操作を行っており、その際、「ダム決壊の恐れがある」とアナウンスされた流域住民は恐怖のどん底に突き落とされています。一方、40年の水害以後に流域で進められた河川の拡幅や堤防の整備などの治水対策は着実に効果を発揮し、堤防などの河川整備が終わった部分では、近年全く洪水被害に見舞われることがなくなりました。だからこそ、住民はダムによる治水対策は望んでいないのです。



受信メール: 川辺川ダムへの意見

有識者会議では、川辺川ダム建設の是非を議論していますが、球磨川の河川整備計画はまだ策定されておらず、河川整備計画でダムを選択肢のひとつとするのかどうか、するとすればその規模や形状はどうするのかの素案は示されていません。したがって有識者会議では川辺川ダムの旧計画を基にして検討をされています。

昨年5月11日、球磨川「河川整備基本方針」は、地元住民や前知事の疑問に応えることなく強行決定されました。国土交通省はその後の報告会で、住民の最大の関心事となっている川辺川ダム建設については「河川整備計画で位置づける」と言い続けてきました。

したがって、知事が9月にダムに対する判断をすると言うのであれば、それは河川整備計画上のダムについて判断することになるはずですが、国土交通省は未だに河川整備計画の素案さえ示さず、結果、川辺川ダムが必要なのか必要でないのか明らかにされないままの状況になっています。

以上のことから、知事や有識者会議が9月という期限を切って、国土交通省から整備計画の案も示されないまま、住民の意思や河川法の手続きを無視してまで、「川辺川ダムを造る」ことに積極的な口実を与えるような「判断」をすることは、絶対に止めてください。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

有識者会議でも、「穴あきダム」に関連したような意見が出ています。新聞などに掲載されている「穴あきダムのイメージ図」では、ダム本体の底部に穴を開けて、普段はその穴を川が通り抜け、何ら環境に影響を与えないようなイメージを受けてしまっていますが、それはとんでもない間違いです。

「穴あきダム」の例に挙げられる立野ダム(南阿蘇村の白川に計画中)には堆砂容量があります。ダムの断面図を見てみると、放流口標高215mに対し、堆砂位245m。つまり、「穴」から30mも土砂がたまる計画になっているわけです。

また、穴(放流口)は河床より10mほど高く設置されます。河床変動(洪水などで河床の高さが変わる)が起こりうるので、河床部に放流口は設置できないのです。よって、当然、常時ダム湖もできるし、河床から高さ約40mも堆砂するわけです。

川辺川上流部の朴木(ほうのき)砂防ダム、縦の木砂防ダムを見ても明らかなように、穴あきダムは洪水時に大量の土砂を堆積させ、流量が減ったあと少しの雨でも堆積した土砂が溶け出し、川の濁りを長期化させます。また、下流への土砂供給が止まり、下流の河床の岩盤がむき出しになったり、瀬と淵からなる川の形態も一変します。

治水面を考えると、穴あきダムにはゲートがなく、洪水流量が最も大きいときにゲートをほとんど閉じてしまう「鍋底調節」ができず、川辺川ダムによる治水計画は破綻します。また、治水専用のダムが可能としても、想定以上の規模の洪水のときは非常に危険であることには変わりありません。

巨大ダムは大手ゼネコンが受注しますが、河道の整備や森林の保全は地元の業者が受注できます。穴あきダムには害しかありません。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

川辺川ダムには、下流の川辺川や球磨川の流下能力をはるかに上回る、毎秒5160立方メートルも放流できる非常用放水門が設置される。「その流量は、おおむね700年から1000年に一回程度発生する規模の洪水流量であり、発生する確率が極めて低いもの」であるから心配ないと国土交通省は主張している。しかし、そのような洪水が起きる可能性があるからこそ、危険な放水門が設置されるのではないか。

また、700年間もダムが運用されることは絶対にあるまい。ダムの寿命は100年だと言われている。川辺川ダムが寿命を迎える将来、そのあとは川辺川ダムに替わる治水対策に頼らざるをえなくなる。また、高さ107mもの巨大なダムを、どのような方法で撤去するのであろうか。ダム湖に堆積している膨大な土砂を、どのような方法で処分するのだろうか。撤去費用や撤去期間、環境に与える影響などは考えているのだろうか。

700年や1000年に一度の洪水を心配するのなら、100年しか持たないコンクリートのダムをつくるのではなく、緑のダムや河道整備などによる総合的な治水対策を、今日からでも採るべきではないのか。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

内壁のはく離や亀裂が問題となっている、川辺川ダム付け替え道路の国道445号・瀬目トンネルで、新たにコンクリート製の内壁の一部がはがれ落ちていたことが分かったそうです。

瀬目トンネルは、完成後わずか5年後の2000年10月に、はく離が数カ所見つかリ、その後も亀裂が広がっています。鉄骨や金網のようなもので対策工事はしてあるようですが、通るたびに恐怖を覚えます。ここまで崩れかけたトンネルは、全国にも例はないのではないのでしょうか。

川辺川ダム建設予定地は、四万十帯とよばれる地層です。四万十帯は、多くの断層があり、破碎作用が進んで、地すべりや山腹崩壊を引き起こす地帯が広く分布しています。四万十帯にある、四国の早明浦ダムや奈良の大滝ダムでは、多くの地すべりが発生し、地域住民を避難させるなど深刻な問題となっています。

また、ダム湖のまわりで、大規模な地すべりや山腹崩壊が発生すると、多量の土砂が急激にダム湖に流入します。このために、ダムから大量の水があふれ出て、ダム下流に大洪水を引き起こすことになります。実際に1963年に起きたイタリアのバイオントダムの事故では、大規模な地すべりによりダム津波が発生し、ダム堰堤を乗り越え、高さ70m以上の水の壁となってピアーベ川を流下し、2000人以上の死者を出しました。

国土開発技術研究センターが作成した「川辺川ダム地すべり予察図」を見ると、川辺川ダムサイト予定地も水没予定地周辺も、全て地すべりの危険地域であることが分かります。川辺川ダム予定地周辺の多くのトンネルで、ひび割れや漏水が見られるのは、岩盤が非常に弱い証拠です。このような危険地帯にダムを建設することは、絶対に避けるべきです。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

7月13日の第5回有識者会議を傍聴しました。その中で、「住民はどこまで水害のリスクを許容できるのか」「ダムに反対する人は、今の河道で十分に水を流せるというが、想定を超えた雨の場合、ダムなしでどう対応するのか」との意見が委員から出されました。

ダムに頼った治水では、想定以上の洪水がくるとダム湖は満水になり、ダム湖に流入した水をそのまま放流(非常放流)するしかありません。それまで洪水をため込み放流をおさえた分、放流量は急に増え、下流では川の水位が急激に上昇し、非常に危険です。またダムに頼り、河道の整備を怠るこれまでのやり方では、下流では洪水が大量にあふれます。

一方、ダムに頼らない総合治水では、河道や堤防をよく整備し、その地域にあった様々な治水対策をとるために、想定以上の洪水の場合、ダムに頼った治水よりも小さな被害ですみます。想定を超えた洪水の場合の、ダム放流による水害が許容できないからこそ、ほとんどの水害被災者が川辺川ダム建設を望んでいないのです。

国交省は「平成18年に川内川で実際に降った雨が球磨川に降った場合、人吉でのピーク流量は毎秒7800トンと推定される」と説明します。このことは、川内川と同等の雨が球磨川流域に降ったら、川辺川ダムは役に立たないことを意味しています。今後の異常気象を考えたら、ダムで対応できない降雨があることは否定できません。川内川の事例は、ダムでは対応できない洪水が起こりうることを表している事例なのです。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

川辺川ダムが、科学技術分野の重大な事故・失敗例を集めた文部科学省の外郭団体「科学技術振興機構」がまとめた『失敗百選』に選ばれています。失敗百選には、チェルノブイリ原発事故、日航ジャンボ機墜落事故なども選ばれています。データ作成者は、松尾直樹氏（東京大学）となっており、事例の概要や、失敗に至ったシナリオなども示してあります。さいごに、「受益者である周辺住民の意見を十分に聞く場を設け、徹底的に議論を戦わせて合意点を探ることが重要である。事業を早く実行しようとして、合意を得る作業を蔑ろにすると住民の反発から、事業の中断あるいは再検討という事態に陥る危険性があり、むしろ多くの時間と費用がかかることになる」とまとめてあります。

コンクリートのダムには寿命もあります。ダムが寿命を迎える将来、球磨川の治水はどうなるのでしょうか。未来のためにも川辺川ダムではなく、ダムに頼らない治水に転換すべきです。





## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

有識者会議では、川辺川ダム建設の是非を議論していますが、「洪水調節に川辺川ダムが必要か」という球磨川の河川整備計画ははまだ策定されていません。

河川整備計画は、河川整備基本方針と同じ規模の洪水ではなく、現実に対応可能な規模の洪水を対象として策定されるものです。たとえば、人口がひどく密集している多摩川(東京・神奈川)でも河川整備基本方針は200年に1回の洪水が想定されていますが、河川整備計画は戦後最大の洪水を対象として策定されています。また、熊本県内の白川では、「近年発生した最大の洪水でおおむね20~30年に1回の確率で発生する規模」となっています。このことから球磨川においても河川整備計画は戦後最大の洪水を対象として策定されれば十分です。流域で最も人口の多い八代・人吉地区では、戦後最大の流量(1982年7月洪水)に対しても堤防を越水することはありませんでした。従って、球磨川でも戦後最大の洪水を対象とする河川整備計画を策定すれば、川辺川ダムは必要ありません。



受信メール: 川辺川ダムへの意見

昨年5月から、球磨川流域の12市町村など計53会場で開催された、国土交通省の「川づくり報告会」(河川整備基本方針の報告会)に、流域住民等のべ1481名が参加しました。私も5箇所の会場で参加・傍聴したのですが、参加した住民から、川辺川ダム建設を望む意見は全く出ませんでした。国土交通省・八代河川国道事務所のホームページに公開された発言記録を見ても、河川改修などすぐにできる治水対策を求める声がほとんどで、全発言数887件のうち「治水のために川辺川ダムが必要」との発言はわずか4件でした。

また、球磨川流域で近年の記録的な豪雨で浸水被害にあわれた方々に聞き取り調査した結果を見ても、ダム以外の治水対策を求められている方が67戸で、治水対策に川辺川ダム建設を望まれる方は、わずか2戸でした。

さらには、最近の世論調査を見ても、川辺川ダム反対が賛成を大きく上回っています。特に熊本日日新聞の調査(3月17日付)では、地元球磨人吉が最も反対が多く、68.5パーセントにも上っています。

建設省(当時)の一方的な計画発表から42年。ダム計画により長年の苦難を強いられたのは、水没予定地だった五木村民、流域の漁民、水害被害者をはじめ全ての住民だと思います。川辺川ダムは中止すべきです。



## 受信メール: 川辺川ダムへの意見

淀川水系流域委員会が提示したことは「治水効果がわずかで現実的な意味が薄いダム建設などは捨て置いて、想定を超える洪水が来ても人命を守ることができる治水対策を最優先で進めること」でした。これはまさに、治水の基本理念であり、球磨川水系においてもこの理念が適用されるべきです。

想定規模を大きく上回る洪水が到来し、堤防を超える洪水流量になっても、堤防が決壊しなければ、人命が失われたり、壊滅的な被害を受けることはありません。その点で、計画高水位までの洪水への対応にとどまっている現在の河道整備のあり方を根本から改め、計画高水位以上の堤防部分を強化して耐越水堤防に変えていくことが必要です。

一方、ダムに関しては想定規模以上の洪水がくれば、ダム下流部はむしろより危険な状態になります。その端的な例が2006年7月下旬に未曾有の豪雨が襲った川内川(鹿児島)の鶴田ダムです。当時、ダム上流域の総雨量は1000mm近くに達しました。鶴田ダムの洪水調節計画は最大流入量4600m<sup>3</sup>/秒、最大放流量2400m<sup>3</sup>/秒ですが、降り続く雨のため、鶴田ダムは満水になり、計画最大放流量の1.5倍にもなる流量を放流しました。その結果、ダムによる洪水調節を前提とした流下能力しかなかったダム下流部では洪水が氾濫し、大変な被害が起きました。川辺川ダムでも想定規模以上の洪水がくれば同じような現象が起きることは必至で、ダムは想定外洪水に対して有効な手段ではなく、災害をつくり出す要因になります。川辺川ダムは中止すべきです。